

## 「水の作文大賞」

### 生命の水を守るということ

熊本市立西原中学校 三年 下川 紀実

「水は大切な存在だ」と強く思うようになったのも、昨年四月に起きた熊本地震があったからだ。

地震により、熊本の広い範囲で断水があった。私の家の水道も使えなくなり、私たちは水不足に大変困った。

テレビには、バケツ一杯の水を求めて多くの人が給水車の前に並ぶ姿が写し出されていた。現実が分かっている私には、そんな人々の姿に「あんなバケツ一杯もない水のために並ぶなんて。」と思っていた。しかし、私は「あんなバケツ一杯もない水」さえも私たちの生活に欠かせないことを痛感することになる。

私の家は断水の間、近くの大学の井戸水を使わせてもらっていた。あんなだけかき集めたペットボトルと水筒に水を汲む。水を入れたペットボトルはずしりと重く、リュックサックに背負つたらふらふらした。「かなり汲んだなあ。」と満足していた私に母は、「これだけじゃまだ足りないよ。」と、集めてきた水を全て鍋に移して見せた。私は驚愕した。たくさん汲んだと思っていた水は、実際はおでん用の大鍋一杯分もなかったのだ。この量では手を洗っただけで無くなってしまう。私は最低限の生活にどれほどの水が必要なのか、今までどれほどの水を無駄遣いしてきたのかを改めて思い知らされた。水の大切さとありがたみを痛感した。水が人間にとってどの位重要なのかを調べてみると様々なことが分かった。

まず、私たちは水なしでは生きていけないこと。体の七十パーセントが水でできている人間はその二十パーセントを失ってしまうと全身の機能に様々な異常が起こり、死んでしまう。水は、人間が生きる上で欠かせない生命の源なのだ。

次に、人間が生きるために使える水の量はどの位なのかということ。それは、地球に存在する水の総量十四億立方キロメートルの0.001パーセント。地球の水を一杯の風呂桶にして考えると僅か二十ミリリットルしかないようだ。その僅かな水も汚染により減り続け、今、世界では深刻な水不足が起きている。

世界には安全な水が得られない人が十億人以上いると言われている。上下水道が完備されていない発展途上国の人の多くが生活用水を池や川に頼っている。小さな子どもが重い水瓶を背負い何キロも離れた池へ水を汲みに行く地域もある。そこで得た水は安全な水とは限らない。生活排水や細菌が含まれた水を飲んだことで病気にかかり、命を落とす人も多い。上下水道が完備され、安全な水が使える私たちはどんなに恵まれているだろうか。

「節水」「水を大切に」。日頃から耳にする言葉だ。私はきれいな水が使えることのありがたさを理解し、大切に使用しているつもりだった。しかし、地震を経験し、改めて水の大切さについて考えてみて、自分の意識の甘さを感じた。私たち人間は常にきれいな水を必要としている。それなのに、自らの手でたくさん水を汚している。これは自分で自分の命を奪おうとしているようなものだと思う。一度汚れた水を元のきれいな水に戻すためには、大量の水が必要になる。つまり、私たちが水を汚し続ける限り、水不足は解決されず、知らない間に多くの人の命を奪うことになる。

きれいな水を守り、残していくために私たちがすべきこと。まずは、水の無駄使いを無くし、水を汚さないことだ。雑巾を洗う時はバケツの水を使う。米のとぎ汁、野菜を洗った水は捨てずに水やりに使う。身近な所で少し意識してみてもいい。そして、何より忘れないこと。地震で経験した水が使えなかった日々のこと。今も水不足に苦しむ人々がいること。このことを常に心に刻んでおけば、水を大切に作る気持ちがより強くなるはずだ。水を守っていくことは、生命を守っていくことだと私は思う。